
タトゥーのある女

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タトウーのある女

【Nコード】

N8911N

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

俺はこういうタイプの女は苦手だった。

ブローグ

俺があいつを見たのは、海の家でだった。

ちらちら見え隠れする、右肩のタトゥーは蝶だった。

「かき氷を二つください」

「はいよ、何がいいですか」

「えーと、イチゴ」

あいつは目が切れ長で、どちらかと言えば人を寄せ付けない雰囲気のある女だった。そしてパーカーの下に少し色のある蝶を見せると、どこかの暴力団の女のようにでもあり、少し緊張してあまりじつと見てはいけない気にさせた。

あいつが去ると、同じくバイトのエージは

「かつこいいなあ。あの氷誰と食べるのかなあ。ちょっと見てこようかなあ」

「止せよ。刺青だぜ」

「でも、あれはお洒落に入れてるんじゃないの」

「フン、刺青なんか入れる奴は興味が無いね」

エージはニヤニヤ俺の顔を見ながら

「ジョーがムキになるときって、結構本気だろ」

「黙って早く焼きそばを作れよ！」

俺たちは海の家で二カ月バイトをしていた。

夏休み中とはにかく金を貯めようと考えていた。大学にはやっと入ったけど、二浪した上に私立で親は出してくれてるけど、これはもう地元にいってもらっては困ると言う気持ちもあったからだ。

俺は勉強も嫌いだから嫌だと言ったが、

「親戚で大学行ってないのはお前だけだ。いいからどこかに入れ」
流石に勉強してないから、一度目はアウト。一浪していやいや予備校に通って挑戦したが、カッコに囚われて自分の力を過信して自滅。やっとこさ入学したのは、勉強では話を聞かないが、陸上競技

ではちよつと有名になって来た大学だ。もちろん、俺はクラブも陸上も関係ない。

学部はなぜか文学部。だって、語学も物理も科学ももちろん歴史も興味ない。ただ、本は読むから。

文学部ということで、女子が多くて、かえって自分の居場所はなような気になっていた。だが、そんな俺にも似たような野郎が一人、海江田英二というのが、つまりエージだ。俺は木之元きのもとゆずる譲が本名だが、ジョーと呼ばれていた。やたらと背が高くて、一八八センチの俺は、海兵隊みたいだって。エージはストレートで入ったから一八歳だった。

エージは目がくりくりと二重で髪もクルクルで妙にリスみたいだと、女子に可愛い可愛いと言われていた。可愛いエージに怖いジョー。何だか変な取り合わせだった。

エージは甘ったれで、すぐに下宿にも来るようになった。俺はワルルームマンションと言えば聞こえはいいが、古くてどう見てもアパートだった。六畳で小さな台所、トイレ、シャワーがあった。エージは俺よりずっとお洒落なマンションだったが、こっちがいいとよく泊まっていった。

夏休みは家に帰ろうと思っていたが、家をリフォームすることになり、帰る部屋がなくなった。そこで、エージが見つけてきた海の家のバイトを二人ですることにしたのだ。

「ジョー、明日でこのバイトも終了だね。どこかこのお金でぱつと旅行でもしない？」

「やだよ、こんなに毎日一緒なのに、何でお前と旅行まで行かなくちゃいけないんだよ」

「いいじゃん、別に。楽しいんだから」

「ふん、楽しかないよ」

そんな俺の言葉には耳も貸さずに、エージは旅行代理店のパンフレットをどっさり持ってきた。

「ヨーロッパもいいなあ、アメリカも行ったことないし、カナダも

雄大だな」

「行かないって言ってるだろ。一人で行けよ」

顔を上げると、そこにはあの女がいた。

男と一緒に。男は二〇代後半くらいに見えた。少し髪が長めで、サーファーのようだった。女はその男に何か話していたが、急に振り返ると男は女の頬を思い切り叩いた。

海での痴話喧嘩は山ほど見てきた。だから、あまり気にも留めなかったが女は黙って男を置いて帰ろうとした。すると、さらに怒った男は女のパーカーを掴んだ。流石に危ないと思い、俺は男を羽交い絞めにした。

すると、男は女に向かって吐き捨てるように言った。

「お前なんか、刺青なんかしてるような奴！　いろんな男に抱かれてるんだろ！　いい子ぶりやがって！」

俺は押さえながら

「言い過ぎだろ！　みつともないぜ」

女は見えていたタトゥーを隠そうともせずにパーカーを脱いだまま黙って立ち去った。

その潔さにちよつと驚いたが、この駄々っ子のようなサーファーがみすばらしく感じた。

「痴話喧嘩に入ってきて来るな！」

「すみません」

俺は面倒なことはイヤなのですぐ謝った。だがエージは、腹を立てながら怒鳴った。

「お前が女を怪我させようとしたからだろ！　男のくせに女に暴力かよ！」

「おい、もういいよ」

俺は女に助けると言われたわけでもなかった。だから、女は立ち去った。みつともないのは俺だった。

サーファーはぶつくさ言いながら行ってしまったが、俺たちは海の家を放り出してきたことを思いだした。海の家的主人は怒ってい

だが、体格のいい俺にはあまり叱ることはしなかった。

「困るよ、お金も置いてるんだから」

「すみません」

夜になると俺たちはたんまり貰ったバイト代を手に、50CCバイクにまたがって帰ることにした。

エージと二人で暑い夏を過ごしたバイト代は軽く三十万を超えていた。

「こんなに金を稼ぐのが大変とは思わなかったなあ」

「だが、嬉しいよ。久しぶりの金だ」

二人で並んで帰っていると、後ろからナナハンが来た。

そして俺たちの前に来て左へ止めると合図する。

「なんだよ」

赤いヘルメットを脱ぐと、あの女だった。

「今日はありがとう」

「ああ、怪我は大丈夫？」

「うん、平気。変なところ見せちゃって」

だが、女の眼は腫れていた。

「冷やしてないのか」

「いいの。お礼がしたくて」

エージはお調子者だから

「この先に美味しいパスタの店あるから、ご馳走して」

女はにっこり笑って

「貴方には助けられてない」

俺はこの威勢のいい女が気に入った。

「じゃ、エージは自分で払えよ。俺はご馳走になる」

「なんだよー！ ケチだな。俺も一緒にいただろ！」

女がなだめるように

「いいわ、あんたもおごってあげる」

女はヘルメットをかぶると、エージの後ろについて行った。俺は二人の後を追った。女はタンクトップにパーカー。下はジーンズだ

ったが、長い足に似合っていた。

パスタのエルドラドに着くと、客は少なかった。女は南国風の店が珍しいようで

「初めてきたわ」

「いい店だろ」

エージは自分がこういう店を知ってるんだと強調したいようだった。俺は女の目が気になっていた。あのバカ野郎は女の大事な目を平気で殴るなんて。氷とおしぼりで冷やしたらと渡すと、女は小さく

「ありがとう」

と呟いた。エージは何かを感じているようで、俺と女とをかわるがわる見つめていた。

「ここはアサリのおっさり和風味が最高だぜ」

「じゃ、それ」

エージは勝手に俺もそれと決めつけて三人前注文した。ついでにコーラも。

「本当に今日はありがとう。あそこでもたもたしていると、またあいつに捕まるから帰ってきちゃったけど」

「ストーカーみたいにならないか」

「大丈夫よ。あいつも学校始まったら海には来ないし。女は他にもいるみたいだし」

「ふーん」

「貴方がたも学生？」

「ああ。H大の一回生」

エージはぺらぺらしゃべり過ぎだ。思わず椅子を蹴る。

「何よ、腹が立ったら口で言いなさいよ。蹴るなんてよくないわ」

「ふん」

「そんなことはさっきの男と変わらないのよ」

「君にそんなこと言われたくないね」

「どうして」

「まだ、知り合った程度で友人でも何でもないだろ」

「そうね」

エージは困って間に入って来た。

「まあまあ、これから食事なんだし仲良く食べようぜ」

「おごられたくなんかない」

言ってしまっただけで済んだ。本当に痴話喧嘩みたいだ。

「ごめん、悪かった」

女もすぐに謝った。

「ううん、ごめんなさい。何だかおかしいね」

アサリのパスタは最高だった。あっさり醤油味で、エノキとアサリと少しの貝柱が味を引き立てた。

「君も学生？」

「ううん、今はファーストフード店のバイトしてる」

「今はってことは前は学生？」

「ええ、学費が払えなくなっただけ」

「なんだ、じゃあ、ここもおごらなくていいよ」

「大丈夫よ。もう普通にバイトしてるんだから。それに月末だから給料もらったばかりだし」

「いいよ、俺たちもバイト代出たばかりだから」

「お礼をさせてよ」

「いいったら」

「また…喧嘩になるわ。私が誘ったんだから」

「そうか、じゃご馳走様」

「私、柳楽レイ（やぎら）っていうの」

「俺は木之元譲、こいつは海江田英二」

女は小生意気な感じもするが、賢そうな話し方だった。はっきり意見が言えるのは好きだった。男に任すと言いながら、あとでブチ言う女が一番嫌いだ。控え目に見せて我がままというタイプ。俺は嫌なものはイヤと言って、理由も言えるなんて言う女に出会ったことは大学生になってからは初めてだった。

一時間ほど楽しく食べて、女は帰って行った。住所も電話も聞か

なかった。

だが、彼女の店は聞いた。

第一章

エージは面白そうな女だなと言ってたが、彼女にはしたくないと断言していた。

「なぜだよ」

「あんな頭のよさそうな女は、いつも尻に敷かれちゃうよ」

「ははは、そうかもな」

「ジョーは好きだろ、あんな感じ」

「まあな、はつきりポリシーのあるのはいいよ」

「でも、刺青あるぜ」

「うん、そうだな」

二人はまた、バイクに乗って帰り道を急いだ。

その夜はなかなか眠れなくて、俺は彼女の蝶が夢の中に何度も出てきた。次の日に彼女のバーガー店に行くのはためらわれた。すぐ来たと思われたくはなかった。だが、夕方になるとひと目だけと違って、ついに出かけた。

レイは新宿駅南口近くのバーガー店だと言っていた。ここかと思つてそつと店内を見ると、いた。

決心して彼女のもとへ。

「コーヒーと海老バーガー」

「はい、かしこまりました」

レイは俺を早く見つけていたのか、じつと見つめながら言った。

そして、注文した後、鉛筆で走り書きしたメモを渡してくれた。

『七時である』

俺は頷いた。

バーガーもコーヒーも腹に入れて、この後どこへ行くんだ。居酒屋でもいいか、それともレストランか。俺はデートに疎かった。これから一時間後だ。本屋で立ち読みして、スポーツショップを覗いて、店に戻ると、彼女が待っていた。

「よかった、来てくれて」

「ああ、連絡先聞いてなかったから」

「だって、私から言うの変でしょ」

「いいじゃないか、そんなこと」

「いやよ、あなたから聞いてほしいわ」

「変なこだわりだな」

レイは昨日と違って女らしかった。

「バイクだろ？」

「ううん、電車よ」

「なんで」

「予感がしたの」

「なんの？」

「誘われる予感」

俺はびっくりして、そしてその積極性に少し惚れた。彼女も同じ歳だった。赤ちょうちんの店に入ると、二人してカウンターに座った。

「飲めそうだな」

「弱くはない」

「だろうな」

「うん」

レイは白のカーディガンとTシャツのアンサンブルにクロップドパンツを穿いていた。髪も綺麗にバレッタでアップにしていた。

「ねえ、気になるから聞いてもいいかい」

「うーん、これ？」

レイは右肩を服の上から叩いた。

「うん」

「何か意味があつてしたんだろ」

「うん。一六歳のときにしたの」

「はあ？」

「母さんの再婚相手が私をめちゃくちやにしたの」

「えっ？」

「うん、だから、まだ高校二年だった」

「……」

「そのまま家出して泊めてくれる人もなくて。何にも知らない子どもだったから。したら、人のよさそうなおじさんが泊めてくれるって。でも、それは大間違い。そんなこともわかんなくて。その人が彫師だったの」

レイは泣くこともなく淡々と話していたが、ギュツと自分の腕を掴んで、爪が食い込んでいた。

「いいよ。もういい。その人とはいつ別れたの」

「三カ月で。搜索願が出てるってわかったから」

「その刺青を何て説明したの」

「母さんは何も言わなかった。多分分かってたのよ。娘の荒れた原因は夫しかないって」

「ふーん、そいつはどうした」

「女を作って出て行っただわ。母は捨てられて自暴自棄になって体を壊すほど飲んで、去年死んだわ」

「その男は許せる？」

「ううん、でももういい。というか二度と会わないと思うし」

「ふーん」

「そんな野郎のために、私の人生までダメになるってことはないと思いたい」

感動していた。レイは何度も挫折しそうになっても、つぶれないで来れたのは、この強い意志だ。

「今までどんな人と付き合っても、最後はこの刺青のことを言われて」

「そこまで聞くと、もう俺はレイの手を握っていた。強くて賢い女のはずのレイは震えていた。」

「ごめん、変なこと聞いて」

「いいの、こんなもの入れられたお陰で、まともな人は私に寄って

こようとはしない。昨日は庇ってくれて本当に嬉しかったの。女の子として見てくれてるようで」

「そりゃ、女の子だろ」

俺たちはそれからますます意気投合し、何度も乾杯し、飲んで食べて終電に乗るために走った。

「わー、酔った酔った」

「久しぶり。こんなに気持ちのいいお酒」

「ああ、ちゃんと送って行くから、家はどこだ」

「ここから八つ目」

「よし」

「その後電車ないよ」

「ああ、始発で帰る」

「泊まって行ったら」

「泊まらない！」

「どうして？」

「これからじっくり育てたいの。俺も恋愛らしい恋愛って経験なくて。味わいたいの」

「えっ？ 本当？ 私なもの。みんなみたいに映画や誕生日を祝ったり、そんなデートもしたいの」

「おい、泊まって行ったら何て言っちゃダメだよ」

「ごめん。でもこんなこと言っの初めてよ」

「いや、嬉しいけど、俺はもう少し気持ちをだねえ……」

「うん。私、尊敬される相手になりたい。こんな女って言われたくない。お金貯めて綺麗に消すの、この蝶」

「ふーん、そうなのか」

「うん、だって、子どもとプールに行きたいもん。これあると入れない。銭湯も」

「そうか」

二人が降りた駅には学生も多かったが、レイは笑いながら飛ぶように歩いていった。

「おい、危ないぞ」

俺は最高に幸せだった。

レイの部屋は路地の奥の二階だった。

「じゃ、俺はここで。しつかり送り届けたからな」

「ありがとう」

そう言った途端、レイはえーんえーんと泣きだした。

「なんだよ、びっくりするじゃないか」

「こんなこと初めてなんだもん」

こんなこと、俺だって初めてだった。つい、レイの肩を抱き寄せてキスをしてしまった。なんてことだよ、どこが育てるだよ、もう、俺はドッキンドッキンと心臓が打ち、むしろぶりたい気持ちをぐっと抑えた。

レイは

「今度いつ会える？」

「うーん、暇と言えば暇だけど。提出しないといけないレポートに、全く手をつけてないからなあ」

「そう、私、明後日が休みなの」

「わかった。じゃ、明後日ここへ迎えに来るわ」

「本当？」

「ああ。昼に」

「じゃ、お弁当作ってどこに行く？」

「どこかって、お前はナナハンでカッコいいけど、俺はカブだしなあ」

「いいじゃないの、私が乗せてあげる」

「あーあー、やだやだ。お前の後ろって、こんなでかい男が」

「じゃ、電車で行く？」

「そうする！」

「わかった。じゃ、正午よ。時間守ってね。お腹すかして来て」

レイってこんな可愛い女なのか、俺は宝物を手に入れたような興奮状態で歩きだした。

どこまでもどこまでも。俺は乗り換えて四つ目の駅だったが、歩いて帰って来てしまった。意外と近いなと思って窓を見上げると、人影が見える。エージだ。

「ただいま」

「どこ行つてたんだよ。一日待ったぜ」

「そうか、ケータイ忘れてた」

「普通、若者がケータイ忘れるか？」

「仕方ないだろ」

「彼女か？」

「まあな」

「えーっ、速過ぎでしょう！」

「バカ野郎、そんなことしねえよ」

「うっそー、この時間まで会つてて」

「そんなことより何だよ」

「これさ、旅行！」

「行かないって！俺はレポート手をつけてないんだから」

そう言ってから、急に疲れてきた。すぐにベッドに潜り込もうとすると、エージが

「ねえ、本当に行かないのかよ」

「ああ」

「じゃ、俺もやめた」

なんだよ、こいつ。一人で行動ができないのかよ。そう思ったが、そのまま、心地よい眠りに襲われた。エージは床で座布団を枕に寝ていた。

第二章

その日は朝から天気も良く、俺はレイの弁当を作る姿を想像して妙にハイテンションになっていた。

エージはメールで

『今日の試写会のチケット、手に入ったんですけど、行きましょー』と来たが、俺は用があると言って断った。すると、即ケータイが鳴った。

「えーっ、用って何ですか？」

「何でお前に言うんだよ」

「ひどいなあ、隠し事。わかった！ デートですね」

「どうでもいい！ じゃ切るぞ」

「頑張ってくださいーい！ ドリンクも飲んで！」

「うるさい！」

俺たちはそういうのではないんだから。じっくり焙煎コーヒーみたいに熟していくのさ。フン。だが、気取ってられない、ドリンクという言葉に刺激されて思わず新しいトランクスを穿いた。意味などない。断じてない。

少し早いけど、遅れると可哀そうだと思い家を出た。俺は柄にもなく、なんか花でも買おうかなと彼女の近くの花屋で見っていた。すると、この間のサーファアが走って店の前を横切った。不吉な予感がして、レイの部屋へ一目散に走った。玄関が開いてる！ 冷や汗がタラタラと落ちてくる。心臓が早鐘のようになっている。上り口のところは弁当が散乱していた。

「レイ！」

恐る恐る部屋に入ると、凄まじい荒らされようだった。レイの姿が無くて、襖を開けるとそこにはGパンを降ろされたレイがいた。顔中が腫れあがり、鼻血を出していたレイは、俺の顔を見るなり

「帰って！ 見ないで！」

と、泣き叫んだ。あまりのことに、駆け寄ろうとすると、いやだいやだと泣きじゃくり、ベッドのタオルケットを取って体をすっぱり覆った。

「警察を呼ぼう」

「嫌！ あんな男の話をしたくない！」

「ダメだよ！ 泣き寝入りなんて絶対ダメだ！ 許すことになるんだから！ あんな野郎は捕まえないと！ またやられるかもしれないじゃないか！」

そう言つと、タオルケットから顔を出したレイは、

「そうだね。わかった」

俺が警察に電話すると、早速二人の警官がやって来た。

部屋の状態や彼女の様子を見てすぐに、手配されたのは野村良太のむらりょうたという男だった。大学四年で殆ど学校も行かずに、サーフショップで店長のようなことをしているらしい。

彼女の店の前に、同じナナハンで来たことから知り合ったが、レイのタトゥーをちら見してからは、簡単に自分のものになると思ってたようだった。だが、彼女が海でもそんな関係になるのを嫌だと告げると、あの暴力沙汰、そして、この日の乱暴となった。

警察でレイが話をしている間、俺はあの男が逃げるのを見たのに、捕まえなかったことを悔やんでいた。直感でレイの身に何か起きたことは分かったのに。レイはそのまま病院で検査を受け、診断された。

俺は体の中で言いようのない怒りが渦巻き、だが、そのことを誰にも伝えることはできなかった。また、レイが恥ずかしくて死んでしまいそうと呟いたのも心が折れそうになった。

俺はレイを一人にできないからと、俺の部屋に連れてきた。

「今日はここにいろよ」

「ありがとう」

「すぐに捕まるよ、刑務所に入れられるさ」

「うん」

俺たちは一昨日の気安さも甘い恋心も重たいボールに包まれて、話もできなくなっていた。そんな中、腹が減って来たので、コンビニに行ってくるからと出た。レイをベッドに寝かしてから、鍵を閉めた。今日はエージだって入れまい、そう決めていた。

そうめんや冷やしうどん、サラダに寿司、ついでにパンも買い、ビールも買った。買うと、その場で飲みたくなった。帰る道、ビールを飲みながら歩いていると、エージに会った。

「なんだ！ここにいたのか。どうだった？」

「何も言っな！今日は帰ってくれ」

「冷たいな、どうしたんだよ。もう喧嘩？」

「あの野郎がレイを襲ったんだよ！」

「えっ？」

「今まで警察や病院さ。彼女を一人にできないから今日は連れてきた」

「あの野郎！許しちゃおけねえ」

「ああ、だが、警察も手配してるからいずれ捕まるだろう」

「くそっ！」

エージの気持ちと俺はもちろん変わらない。だが、ここで、カッ力してレイに当たり散らさないとは分らない。俺はそれが怖かった。被害者の彼女を責めるのではないか、そんな気持ちがあるのだ。しかし、飲まずには居られなかった。

エージはすぐに帰って行った。あの男がしたことを思い出してはいけないと思いながらも、Gパンをずり下ろされたレイを見たくないのに頭に浮かんでしまう。ぎりぎり砂をかむような思いを消すために、ビールを飲んだ。

部屋に入ると、レイは寝ていた。タトゥーがあるばかりに、みんな軽い女と思うのだ。あの蝶が憎かった。

古いクーラーが唸りながら、部屋を冷やしてるが、俺の頭は燃えたぎっていた。

「キヤーー！」

びつくりして振り向くと、レイは目を見開いて、やがて大粒の涙がこぼれてきた。

「ごめん、ごめん」

「なんで、レイが謝るのさ。お前は悪くないよ」

肩を抱きながら、レイの右肩の蝶を見ると、齒型が見えた。その瞬間、俺は言いようのない憤りにかられて部屋を出た。

振りほどく気もなかったのに、結果的にそうなってしまった。レイは黙って部屋から出てきて帰るとつぶやいた。

「ダメだよ。まだ捕まってるんだから」

「警察が見回ってくれてるから」

「じゃ、送るよ」

「うつん、タクシー拾って」

「うつん」

俺たちはタクシーを待ちながら、沈黙のなかにいた。個人タクシーが来たので、俺は手を高く上げて止めた。レイは微笑んで

「じゃ、さよなら」

そう言っていると、振り返ることなくタクシーで去った。

俺は部屋に入ると、彼女が寝ていたベッドに寝そべり、その残り香の中で果てた。バカな自分に情けなくて涙がとめどなくあふれてきた。そして、自分の不甲斐無さに嫌悪していた。

「俺って、何て野郎だ。あいつと変わんない」

残りのビールも全て開けた。一人でいるのが辛い夜だった。

俺は初めてソープへ行った。

第三章

俺は時間を置きたかった。

レイに会わず顔が無かった。

男の風上にも置けないのはこの俺だ。

大切に思っているのに、つれないことをした俺は安っぽい野郎だ。喧嘩なんて強くても、意味ない。

助けてと叫んでいたに違いないレイを、心細かったに違いないレイを、なぜ大きな気持ちでもっと強く抱きとめなかったのか。

情けない自分に残されてる道は、真剣に考えて、そして彼女を迎えに行くんだ。

エージは大学で会っても、あのときのことを何も聞こうとはしなかった。それは俺にとってはありがたかった。

「ねえ、レポート済んだ？」

「まだだよ」

「あと二日だよ」

「どうにかなりそうだ」

「本当っすか」

「ああ。殆ど出来てる」

「わおー、いつの間に」

「お前もやれ！」

「僕は、今回は無理」

そこへ、同じクラスの水谷佐織みずたにさおりがやって来た。

「はい、お二人さん。夏休みどうだった？」

「はい、海の家でバイトやり続けたよ」

「すごいじゃん。じゃあお金持ち？」

「だーめ、これは大切な生活費となるの」

二人のやり取りを聞きながら、ボーっとケータイを開くとレイからメールが来た。

「店を辞めました。さようなら」

驚いて、俺はエージたちを置いて走り出した。エージが追いかけてきて

「どうしたん？」

「あいつが店を辞めた、さようならって」

そこまで聞くと、一緒に走りだしたエージ。

「お前はいいよ」

「心配だよ。何で一緒にいないのさ」

「ああ、ろくでなしさ、俺は」

それには答えず、エージは俺と肩を並べて走った。呑気に大学へ来た俺が情けなかった。明らかに逃げている。彼女を襲った野郎も捕まらないのに、何で一人にしたんだよ。自分がみっともない弱虫で、彼女に会わず顔はなかった。

彼女の部屋はもぬけの殻だった。

すでに部屋を引き払ったらしい。

隣の部屋の住人は、

「今朝、業者が来て荷物を運び出していたよ」

「どこへ行くって言ってましたか」

「何にも」

「本人は業者に全て頼んだようで、もういなかったから。ほとんどは売ったようですよ」

エージと俺は、空っぽの部屋の前で立ち尽くすしかなかった。

「どこへ行ったんかなあ」

エージのつぶやきは俺の考えと同じだった。俺も見当もつかなかった。レイのことよく知らないのだ。不幸な生い立ちぐらいで、どこへ行ったのだろう。

「店に行って聞いてみるわ」

エージにそう言つと、またついてきた。

「いいよ、お前は」

「心配だし、こうなったらどこまでも探すから」

新宿の店に行くと、

「可哀そうだよねえ。顔腫らしてさ。やめるって聞いてもひきとめることもできなかったよ。うちも客商売だから。気の付く頭のいい子だったんだけどなあ」

「そうですか。どこへ行くのかも聞いてませんか」

「うん。警察の人も来てたから、警察には言ってるんじゃないの？　そうだ、俺は一緒に行っただから、教えてくれるかもしれない。二人で警察に向かう途中、俺たちは押し黙ったままだった。レイの蝶についていた歯型。これはエージにも話せないことだった。だが、あの歯型を見るまでは、助けようと思っていた。本当に全身全霊で。なのに、歯型を見た時、生々しい光景が想像できてしまったのだ。愚かで安っぽい男の想像が。」

警察ではあのに担当してくれた刑事が、

「悪いけど、家族でないから言えないんだ。個人情報なのでね」

「でも、元気にいるんですね」

「うん、こちらも気をつけて見回るように言ってるから、大丈夫だよ」

「こんなメールが来て。心配なんです」

「うーん、わかるけど、言えないよ。あの子が一人になりたい理由も分かるんだろう？」

「……」

「犯人は捕まってますか」

「いや、だけど、必ず捕まえるよ」

「お願いします」

俺は深々と頭を下げて警察を出た。ケータイもメールも届かない。彼女はアドレスも変更したのだ。

エージは

「風のようにいなくなってしまったねえ」

「違うよ、俺がダメなのさ」

「そうかなあ」

「犯人は絶対に捕まえるぞ。警察だけになんて任せられん」

「俺も、手伝うよ!」

「だからいいって。危ないよ」

「だって、おごつてもらったもんね。パスタ」

俺は笑った。あの日に戻りたかった。楽しかったあの二日間。

重い足取りで部屋に帰ると、暑い暑いと言っていたのに、いつの間にか秋風が吹いて体が冷えていた。一人で座っていると、耐えられないような孤独が襲ってくる。昨日まで平気だったのに、この感覚は何だろう。慌ててテレビをつける。テレビの音でもしないと、自分の鼓動しか聞こえないのは寂しくてどうにかなりそうだった。

お天気カメラが渋谷の街を映していた。ふと、目に入ったのはレイだった。あのナナハンが信号前で止まったのだ。彼女のヘルメット。渋谷から東方向に向かうのか。

俺は五〇のバイクで向かった。いくらなんでもそこに彼女がいるはずはないが、きっとこの道を向かったんだと思うと行きたかった。渋谷のハチ公前は若者であふれていた。

どこにもいないが、この東京から離れていないという確信があった。理由はないが、きっと東京にいるんだと、絶対に探して見せると誓った。

俺はバイクのことには詳しくないので、取りあえずバイクのショップに行つて聞いてみることにした。あんなでかいのに乗るのはレイしかないような気がした。

だが、店員はそんなことはないと言つて笑つて言った。

「最近多いです。でも、うちには来てませんねえ。そういう人」
肩を落しながら、ガソリンスタンドを回ることにした。どこかで給油してるんじゃないかと。だが、渋谷界隈ではそんな女性は見えないと言つことだった。テレビにちよつと映ったぐらいでは違つたのだから、いいや、見間違えるはずが無かった。あれは確かにレイだった。

流石に疲れて、俺は部屋に入ると、ハイボールを飲みほして寝た。

次の日、エージが朝早くからやって来た。

「行くよ！ ジョー！」

「どこへ？」

「探しにだよ。いいこと考えたんだから」

第四章

どこへ行くのかと思ったら、彼女が退学した大学というのだ。

「そこへ行けば、レイを知ってる人もいるだろう」

「そうか、エージにしてはいい考えだな」

彼女のいたK大は、キャンパスがお洒落な若者でいっぱいだった。

「君、ちよつと教えてくれない？」

「何？」

こういう時は可愛いエージに限る。

「柳楽レイっていう子」

「知らないわ」

「ナナハンに乗る子だけど」

思わず隣から口が出た。

「ああ、でっかいバイクに乗る子ね」

「そうそう」

「その大学の食堂でバイトしてたわよ」

「ありがとう。聞いてみるよ」

六号棟の食堂は五〇代くらいの女性がいた。

「あの、こちらに柳楽レイのことをご存じの方いませんか？」

「えっ、あの子が何か」

「あ、よかった。知ってるんですね」

「ええ、ここでバイトしていたから」

「今、どこにいるか分かりますか」

「知らないわ。辞めてから会ってないから」

俺はあの子の出身地が知りたかった。だが、そのことを彼女は知らないと言った。だが、しばらく思い出すかのように腕を組んでいた。

「そうそう、子どものときに神社のお祭りのことを言ってたわ」

「どこの？」

「新宿だわね。神楽坂の話も出てたから」

「神楽坂？」

「昔は芸者さんなんか多かったけど、最近はあまり見なくなつたわね。だけど、よくドラマにあの街並みは使われるわね」

「他に、何か聞いていませんか」

「二人とも、食事の時の仕事だから話してる暇なくて。それより、貴方達は誰？」

「あ、僕たち、一緒にバイトしていた海江田と木之元と言います。彼女にお金を借りたままで、やっとバイトが終わって貯めたので返そうと思つたら引越してしまつて」

俺たちは運転免許証と学生証を見せた。

「あら、そう」

「ここに連絡先を書いておきますので、もし、何でもいいので彼女のことを思いだしたら連絡をいただけますか」

「いいわよ」

彼女は赤木芳子と名乗った。

「あ、そうだ、彼女におじさんという人が訪ねてきたわ」

「え、おじさん？」

「待つて。名刺を抽斗に確か片付けたはず」

赤木さんはレジの下の抽斗にあるものを、しばらく覗きこんでいたが

「ごめん、家に持って帰つたかも。見当たらないわ」

「どんな人でしたか」

「でも、その人の顔を見たら、レイちゃんは青ざめちゃつて」

「何をしてる人ですか」

「芸術関係で、絵を描いてるつて言つたと思う」

「絵描きさん？」

「ええ、でも絵描きつて雰囲気ではなかったわね」

「どんな？」

「うーん、こう言つては失礼かな、ちょっと危ない感じ」

「やくざみたいなの？」

「凄味があるのよ。ちらつと刺青が見えたの」

それは、蝶を彫った奴に違いない。

「名前を覚えてませんか」

「ごめん。でも名刺を探すから」

「お願いします」

二人で深々と頭を下げて学食を出た。

なぜ、あの彫師が今更訪ねてきたのか。青ざめるのは無理のない話だ。

「インターネットでも探してみるか」

エージのマンションが近いので、そのまま二人で帰ることにした。東京のどこかの彫師に違いない。そんな仕事は東京ぐらいしかないのではないだろうか。

エージは帰るとすぐにノートパソコンを開いた。

「ジョー、見てみるよ」

信じられないほどあった。しかも東京だけでなく、北海道、青森、岩手など、どこかしこにあった。

「この中から探すのは無理かもな。赤木さんの連絡を期待して待つしかないな」

「でも、なんで今、彼女を探してるんだろう。もっと彫りたいってことかなあ」

「バカ野郎！ そんなこと許されるわけないだろう」

「俺を怒るなよ」

エージは脹れていた。

「ごめん、つい」

「もう、何でそんなに燃え上がるのに、手を離れたんだよ」

それは俺も分からない。いや、分かっているけど言いたくなかった。

「だけど、神楽坂あたりに住んでたのかもしれないな」

「そうだな。行ってみるか」

また、俺たちは揃って出た。古くからありそうな料亭と木の塀が

箒で掃かれた路地にとても似合っていた。近くの神社は慰霊塔があり、隣には幼稚園もあった。街中だが、静かなたたずまい。

「いい所だな」

「ああ、東京って不思議だよ。大都会だけど緑も多いといえば多いよ」

「この幼稚園でも通ってないかな」

「もうそんな古くからいる先生は、分らないんじゃないか」

「それに個人情報だからなあ」

「いいそ、交番で聞いたら分かるんじゃないだろうか」

「柳楽って名前は多くないと思うぞ」

「確かおふくろさんも最近死んだみたいだから。そんなことから分からないかなあ」

並んで歩きながら、路地を穿いてるおばあさんに聞いてみた。

「あの、この近くで柳楽さんというお宅はありませんか」

「えー、この近くにそんな名前はいませんね」

おばあさんは、顔をかしげながら答えてくれた。すると、自転車で通りかかったおじいさんに

「ねえ、木原さん、この近くに柳楽さんていた？」

「柳楽？ 知らねえなあ」

「ほらね、いないみたいよ」

すると、そのおばあさんは

「お米屋さんなら昔は知らない家なかったけど」

「お米屋さんですか」

「ええ、必ず配達してもらってたから。どこの家も」

すごい。そうなのか。米はスーパーで買うものだと思っていた。

二人でその米穀店を教えてもらうと、おばあさんに深く頭を下げて礼を言った。

「まあ、可愛いわねえ。お兄さんたち、ちょっと待ってて」

おばあさんは家に電話番号を書いてるからと、家に戻って調べてくれた。番号もひかえ、二人でさらに感謝を述べると、手に飴を握

らせてくれた。幾つと思ってるのかと聞いたかったが、俺たちは素直に

「ありがとうございます」

と言って、ポケットに入れた。この辺りは昔の江戸の名残が残っているのかもしれない。そう思えた。

第五章

鮫島米穀店は古い店構えで、創業から八十年だと古く破れそうな看板に書いてある。エージが声を掛ける。

「ごめんください」

誰も出てこない。さらに大きな声で俺が叫ぶ。

「ごめんくださーい」

やっと奥から、さっきのおばあさんより歳が上のような爺さんが現れた。

「いらつしゃい。そんな大声出さなくても聞こえてるよ」

ブツブツ客に文句が言える爺さんだ。エージが聞こえてるなら出てくりやいいのにとぶつくさ言う。

「あの、この辺りに柳樂さんのお宅はありませんか」

「ああ、あの別嬪さんが死んじまって。あれから、もうしばらく経つなあ」

「じゃ、家はご存じですね」

「ああ、だが、少し遠いよあの家は」

話していると、四十代くらいの女性が現れた。

「あら、いらつしゃいませ。何を？」

「いや、柳樂さんのお宅を教えていただきたくて」

「あら、あそこはもう取引ないから、いないんじゃないの？」

「あそこの奥さんは亡くなったそうですね」

「ええ、随分と昔は神楽坂で浮名を流した人よ」

そうなのか、思わずエージと二人で顔を見合わせた。

「あそこにお嬢さんがいたと思うんですけど」

「ええ、いい子だね。でも、高校の時からおかしくなってるね」

配達から主人が戻ってきたようだ。店の前にライトバンが止まって、白髪の男性が入って来た。

「はあ、何か？」

俺たちはまた、同じようなことを聞いた。柳楽の家までなかなか行けないようだ。

「ああ、あそこは誰もいないから、取り壊されてね」

「えーっ、そうなんですか」

奥さんも知らなかったようで驚いていた。俺たちはかなり期待していたからシヨックを受けた。

「そのアパートは柳楽さんの？」

「いやあ、あそこは金がなくなってしまったよ。旦那が女と逃げし、残された奥さんはガンで亡くなったし、娘は出ていかざるを得なかったんだよ。可哀そうに。立ち退きに遭ったんだよ」

俺は、若いのに気の毒だと言うこの主人に好感をもった。誰が見ても、レイは不幸だと知っていたのだ。たまらない思いがした。高校生で義父に乱暴され、家を飛び出したら彫り師に刺青を入れられ、そして、今またストーカーに乱暴されたレイ。ああ、なんてことだ！

エージは、

「そこのお嬢さんと仲良しの子っていなかったんですか」

「レイちゃんって言ったわよね、あの子の友達って、うちの息子の一つ下だから、この裏の喫茶店のマスターに聞けば分かるかもよ」

奥さんは気軽に店を出て、すぐ裏の喫茶店「檸檬」を指さした。

「あそこのマスターが同い年よ」

俺はこの親切な噂好きの店で、コシヒカリを買って、明日届けてもらうことにした。

「ありがとうございます」

「こちらこそ。毎度ありー」

エージと二人で喫茶店に向かうと、小さなボックス席が二つとカウンターしかないが、落ち着いた店内にBGMでジャズが流れていた。

「コーヒー」

「僕はコーラ」

マスターはオールバックで必要以上にテカテカさせていた。隣に

立ってるのは母親だろうか。コーヒーをドリップで入れていた。

「お待たせしました」

カップの横には小さなクッキーが二個付いていた。コーラにも。東京でもこんなことをする店があるんだなって少しびっくりした。

「あの、柳楽レイって同級生ですか」

マスターは少しびっくりしたように、俺たちの顔をじっと見つめてきた。

「貴方がたは？」

「実は探してるんです。怪しいものではありません」

俺たちの話を聞いて怪しいと思ったかどうかは分からないが、どう見てもやくざには見えてないようだった。

「もう、ここ半年は会ってないよ。葬儀も密葬だったし。でも、葬儀の後にこの店に来てコーヒーを飲んだんだ。疲れたような顔で」

すると、その話が聞こえたようで母親らしき女性がカウンターから話しかけてきた。

「気の毒よね。レイちゃん。お母さんもアルコールが原因で道で倒れたりしてねえ。その都度、あの子が抱えて連れて帰ってたわ。そのうちに、入院したけどお金もかかるのに。結局、レイちゃんは夜の商売に入ったのよ」

初めて聞く話だった。レイがファーストフードの店で働いていたのは分かっていたが、どうもそれだけではなかったようだ。ガンの薬は高く、彼女一人が店員で働いたくらいでは払うことはできなかったのだ。家屋をとくに売り払っていたのは義父だという。レイの母は昔の旦那から家や金を貰っていたらしい。レイは私生児だというのだ。

「本当のお父さんは？」

「みんなが探せて言ったんだけど、奥さんが口をつぐんで教えなかったらしいの。レイちゃん、本当に一人ぼっちよ」

俺は一日動き回って分かったのは、レイがひどく寂しい人生を送ってきたということ、さらに、その周りにいた家族が、支えになら

なかったということ。彼女は近所の人にも、同級生にも甘えなかったという。檸檬を出るときにマスターが

「もし、レイちゃんに会ったら、店に来るように言ってお下さい。できることはするからって」

「ありがとうございます。必ず伝えます」

二人で頭を下げて帰る道すがら、エージは目に涙をためていた。

「俺って、反省するわー。すごく甘やかされて生きてきたし当然だと思ってたけど、世の中、レイのような子もいるんだねえ」

「ああ、本人は何にも悪くないのになあ」

俺たちは駅前の屋台に入った。心底疲れていた。屋台の主人は、
「何にしましょうか」

「ビール！」

エージは未成年なのに、平気で一緒に注文する。まあ、俺などは十五から飲んでいたが。熱いおでんを汗をかきながら食べる。そう言えば腹が減っていた。空きっ腹にビールが浸みわたる。

「うまいねえ、おじさん。この大根」

「そうですか、それは嬉しいです」

「うま過ぎて泣けてくるよ」

エージは涙もろい奴だ。飲めば飲むほど涙腺が緩んでくるようだった。だが、それは俺も同じ気持ちだった。エージを背中に担いで帰るはめになった俺は、背中の野郎がとてつもなく重いけど、この重さは今日の感謝の気持ちだ。エージと一緒になかったら、こんなに一人では探せなかった。何しろ俺は口下手だった。やっとの思いで階段を上がると、ドアの前に刑事が立っていた。

第六章

刑事は定岡博と言った。

「何か？」

「ええ、この女性を探しているんだけど」

レイだった。もちろん俺たちも探してる。

「彼女がいなくなってるね、そして、彫り師の松井大吾って男性が殺されてね」

「えっ、彫り師が」

俺は、エージを降ろした。すやすやと気持ちよさそうに寝ている。ドアを開けてエージをベッドに追いやると、刑事の話を聞くことにした。

「この前、男に乱暴される事件があったから、警察の見回りもするということで、彼女はホテルに泊まって部屋を探すという話だったんだが」

「ホテルですか」

「うん、でも、帰ってこないし、いつの間にかチェックアウトしたらしくて」

「それと、彫り師の人の死とどんな関係が」

「ああ、彼女の診断の時に右肩に刺青があって、その刺青をしたのが松井なんだよ」

「でも、だからって、彼女の失踪と関係があるとは……」
「思いたくなかった。」

「ああ、ところが、彼の部屋から彼女の指紋が出てね」
「えっ」

言葉が出てこない。まさか、彼女が殺したのか。恨みがあることは十分過ぎるほど分かってはいたが。

「でも、男を殺すなんてできますか。彼女の力で」

「それがね、背中から一突きなんだよ。だから、相手は油断してい

たんじゃないかな」

レイはどういうつもりで男に会いに行ったのだろう。確か、学食にも男は探しに来ていたはずだ。探していたのは彫り師の方だ。俺は今日の大学での話を伝えた。男の方が探していたのだと。

「どうして、君がそんなに彼女を探しているんだい」

「いや、知り合ったばかりなんですけど、彼女はとても心を許せる人でやっとな付き合いたした時に事件が起きてしまって。だのに、放ってしまったようなことになってしまって」

しどろもどろで刑事に話す俺。どう繕ってもカッコ悪い話だった。「そうか、彼女は本当に気の毒だが、殺したとなると話は別だ。君のところに連絡があつたら、是非教えてくれ」

「わかりました」

「重要参考人なので、隠したら君もまずいことになるからね」

「はい」

だが、そんなこと出来るはずもない。彼女は俺に居所なんて教えてこない。信用はゼロなんだ。

翌朝、新聞を買いに走った。普段は滅多に買わないが、コンビニに急いで行き、いくつか買った。彫り師の記事はどの新聞にも載っていたが、彼女のことは触れてはいなかった。まだ、警察も発表していないのか。

エージは気持ち悪いと言いながら起きてきた。

「どうしたん、こんなに新聞買つて」

「あいつに彫った彫り師が殺されたんだ」

「えっ」

「昨日、刑事が来てレイの指紋が見つかったって」

「えーっ、嘘だろう！」

「だが、まだ、レイが殺したかどうかは何も分かってない。後ろから一突きだそうだ」

エージは新聞を読み始めた。すると、ケータイが鳴った。学食の赤木さんだった。

「あつたの、名刺が。松井大吾って人だわ」

「ありがとうございます」

俺は記事のことは言わなかった。赤木さんは場所も教えてくれたが、もうそこはいつでもよかった。彼は死んでしまったのだから。丁重に礼を述べて切ると、俺たちはこれからどうするか考えた。

エージも俺も、彼女が復讐をしたら、サーファーか、義父か、他にもまだいるのだろうか考えた。

エージは取りあえずこれからの動き方は警察に知られてはまずいと話した。

「だって、俺たちはレイを信じてるし、警察に突き出すために探してるんじゃないからなあ」

「ああ、しかも、俺はあいつがそんなことを考えてとは思いたくない」

「うーん、でも、あれほど不幸続きだと恨みなくなるのは分かるよなあ」

「それはそうだが、そんなことのために一生を棒に振るか」

「いや、その一生を台無しにされてるのも、そいつらにだろ？」

エージの言葉は適切だった。義父が犯したことから始まった家出。そのいきついた場所が彫り師。そして、さらにストーカー。

「なあ、病院って母親がそんな病気の時にはソーシャルワーカーが付くんじゃないか」

「そうだねえ、ジョー、僕もおかしいなって思ったんだよ」

「どこに入院したか聞いてみようか、あの米屋さん」

「そうだ、今日届けてくれるって言ったよな」

レイがもし復讐を企てているとしたら、それは俺の責任だと感じていた。俺が包みこんでいたら、彼女はそこまで殺伐とした人生を選びはしなかったはずだ。俺の心は鉛のように重くなった。

俺たちはカップラーメンを二個食べると、出かける用意をした。そこへ、昨日の鮫島米穀店がやって来た。

「どうも、ありがとうございます」

「あのう、もう一つお聞きしたいのですけど」

「はあ、何でしょうか」

「レイちゃんのお母さんの入院した病院はどこですか」

「あれは、新宿の国花病院だったと思います。一度、そこで私も診察してもらった時に会いましたから」

「そうですか。ありがとうございます」

鮫島米穀店はまた、いつでもいらっしゃって下さいと礼を述べて帰っていった。俺たちは二手に分かれて、俺は国花病院へ、エージはあのサーファアの店に行って聞き込みをすることになった。どちらにしても、速く彼女が男を探さないと、とんでもないことになると思った。

第七章

国花病院は、大きな総合病院だった。俺は受付でその頃のことを尋ねようとしたが、個人情報 の厚い壁は、刑事でもない若い俺に教えるはずもなく、帰るしかなかった。

諦めて待合室をでると、一人の女性が追いかけてきた。

「あのう、すみません」

「はあ」

「私、柳樂さんのお嬢さんと話したことのあるソーシャルワーカーの谷田です」

「あ、そうですか。僕は彼女の知り合いで木之元といいます。今、彼女の行きそうなところを探してるんです」

谷田さんは四十前くらいの綺麗な人だった。優しそうな感じで、この人なら、きっと安心して彼女だって相談できたはずだ。

「みんな心配してるんです。彼女と近所だった人も同級生も」

「そうですか。私が担当になった時に、柳樂さんのお母さんはもう末期がんで、彼女が一人残されてしまうから、今後のことを相談しようとしたんです。でも、レイさんは、新しいお父さんとは性格的に合わないと言って連絡を嫌がったんです」

それはそうだろう、原因を作った男なのだから。

「お母さんからレイさんの父親のことを聞いてみようとしたのに、死にましたというだけで、名前も言っただけでさらなかったんです」

「そうですか」

「その相談やら、入院費用のことを話そうとしているうちに、あれよあれよとお母さんの病状が悪化して」

「それで、お金の方は？」

「ええ、賢いお嬢さんだったから、自分で何とかしようとしたんでしょうね。私には一言の相談もなくて」

「彼女はお金を持ってきたんですか」

「ええ、大学はやめて働き始めたからと言って、入院費用を持ってきたんです」

「そんな若い子が働いたからと言ってたくさんのお金を持って来れないでしょう」

「ええ、でも、彼女、持ってきたのよ。親戚から借りたからって」

「親戚？ 誰だろう」

「芸術関係の仕事をしてるというおじさんがいたようですよ」

「松井？」

「ええ、そうです」

彼女が頼るのは彫り師しかいなかったのか。義父は死んでもいいのだよな。でも、そいつを殺したのだろうか、おかしいな。

「松井って人には会いましたか」

「ええ、一度お母さんが亡くなった時に」

「どんな人ですか」

「寡黙な人でしたね。五十歳くらいの人でしたよ」

谷田さんはレイのことをとても心配していたようだ。あれから、家にも連絡したが、もうすでに家は売られていた。そうだ、あの義父が売ったのだ。住むところもないレイは彫り師のもとへ行ったのだろうか。

確かに俺と話していた時も、彫り師を恨んでる様子はなかった。もちろん、刺青自体は消したいと話してはいたが。彫り師もどうして、彼女にお金などを貸したのか。聞くところによると、入院費用は全てで二百三十万もかったと言う。

それほどの金を、一度彫った女の子に良心の呵責を感じて払ったのか。何だかおかしい。彼はレイを愛したのか。きっとそうに違いない。彼はレイを愛していたんだ。

国花病院での話に驚きながらも、それでは、一体夜の商売をする必要はなかったはずなのに、なぜやったのか。彼に借りた金を返すために働いたのか。それとも、危ない仕事の仲介を彼がしたのか。謎は謎を呼んだ。

すると、エージから連絡が入った。

「だめっす、あいつはこの近辺には姿を現してないみたいです」

「そうか」

「そちらはどうでした？」

「ああ、話が聞けたよ」

「それと、あの野郎の彼女に会いました」

「えっ、女がいるのか」

「とんでもない野郎だよ。子どももいます」

「なんてことだ！」

「その女も籍は入れてもらってなくて、あいつに貢いでるんです」

「でも、それなら、きつと頼れるのはその女だろうなあ」

「うん、同じことは警察も感じてるみたいで、会っちゃいましたよ、刑事の定岡さん。何やってるんだって叱られました」

「ということは、その女のところは警察が見張ってくれるな」

「そうっすね。となると、義父さんしかいませんね」

それが一番性質が悪い野郎だ。どこに行ったのか、あるいは困った時の鮫島さんだ。俺はエージにこれから米屋に会って帰ることを告げた。そして、レポートのために家に帰れと言った。

「えーっ、折角調べてきたことを俺にも教えてよ」

「わかったよ。でも、明日までに何とかレポート進めろよ」

「僕は今年はこれはもう無理！」

こまった奴だなと思いつながら、エージの奮闘ぶりは本当に助かっていた。

鮫島さんは、ニコニコと応対してくれた。もう家族全員が出てくる噂好きの一家だ。

「ほう、いらっしやい」

「何度もすみません」

「いえいえ、何ですか」

俺は義父の名前すら知らないの、それから尋ねた。

「ちよっと待ってて。昔の住宅地図もって来て」

奥から地図を持った奥さんが出てきた。

「これね、何を見るの？」

「確か柳楽から度変わったんだよね」

「そうだった」

鮫島さんは柳楽の家をすぐに開いて、赤で修正したところを見せた。指さしたところは柳楽を二重線で消して藤田になっていた。奥さんは

「そうそう藤田さんになったけど、下の名前は知らないねえ。その名前は本当ではないみたいでしたねえ」

「というところ？」

「だって、レイちゃんの名前はずっと変わらなかったもの」

「そうか。じゃ、内縁ってことですか」

「ひよつとすると、通称は藤田でも柳楽はそのままだったんじゃない」

人のいい米屋の想像は、殆ど俺と変わらなかった。すると、爺さんが

「あのお袋さんは綺麗だったねえ」

「爺さんはそんなことばかり覚えてるのねえ」

「粹な女でねえ、右肩に彫り物があるって噂だったよ」

俺はびっくりした。レイの彫り物を爺さんが間違って言ってるのだと思った。すると、爺さんは

「昔のいい男に彫ってもらったって、聞いたことがあったよ」

「そんな話、どこで聞いたの？」

奥さんが責めるように爺さんに言った。俺もその成り行きに驚いた。

「あれは、この坂の下の居酒屋のひょうたんだよ」

「ああ、あの人が男に逃げられた時、いつも飲んでいた店ね」

「今もありますか？ その店」

俺は行ってみようと思っていた。だが、鮫島さんは首を振った。

「あの店はつぶれちゃったよ。主人もどこへ行ったかねえ、夜逃げ

だつたよ」

爺さんの話のお陰で気付いたことは、松井って彫り師はどうも母親の旦那で、レイの父親ではないかということだった。

となると、ますます、殺しの線はあり得ない。

きっとレイは殺してなどいない。

第八章

俺はエージの家に寄った。あいつは確か風呂に入るって、一度帰るはずだった。

トントン。俺は珍しくノックなんてしてみた。もう帰ってるはずのあいつの部屋が真っ暗だったから。

返事もなくて、俺は外から近所に気を使いながら

「おい、エージ。俺だよ」

風呂の音もしなくて、まだ帰ってないのか、俺はドアノブに手を掛けると、すんなりと開いた。あいつのスニーカーもあった。

「いるのかよ。風呂で寝てるんじゃないか」

俺はしばらく部屋で待ってたが、風呂で疲れて寝てるのかと思い、風呂場の入り口で声を掛けた。

「おい、エージ。起きてるか」

風呂の水は流れてるようで、だが、全く他の音がしないことに胸騒ぎがしてきた。俺は恐る恐るドアを開けると、エージが倒れていた。裸のまま、首にタオルが巻かれていた。

慌ててエージを抱きかかえたが、エージは息をしていないようだった。しまった。

「エージ！ エージ！」

と叫びながら、俺は人工呼吸をした。息をしろ！ してくれと祈りながら、二回空気を口から送り、一五回心臓マッサージをする。どれだけ繰り返しただろう。エージが大きく息をした。

「おい、エージ！」

エージはうつすらと目を開けると、

「ジョー、いつきたん？」

「誰にやられたんだよ！」

「何を？」

「首を絞められたのは誰にだよ！」

「わかんないよ、シャワーを浴びていたから、後ろからやられて」
俺は警察に通報した。あの定岡さんがやって来た。

「危ないね、君たちは素人なんだから。特にこの一連の事件は非常に危ないよ。強姦されたり、殺されたり、人間性が欠落してるようだ」

「それで、何か手掛かりは」

「ああ、あのサーファアの愛人が出かけたんだが、追いかけている時に君からの通報だよ」

「あ、それはどうも」

「英二君、何か心当たりはあるかい」

「いや、後ろからだったんで。でも、すごい力でしたよ。俺だってそう弱い方じゃないと思うんだけど」

定岡刑事はエージや俺の調べたことをいくつかメモしながら、その母親の刺青と同じものがレイにあるということが引つかかったようだ。

「母親の彫ったものは、当然娘も知っているだろう。でも、その彫り師のことをいつ聞いたのかなあ」

「義父から乱暴されたときに、知っていたからそこへ逃げたんじゃないかなあ」

「うーん、だが、その人が父親かどうかはまた別問題だな」

まして、娘に刺青なんてするかなあと、俺たちは考えた。娘の幸せを考えたら、高校生の娘には入れないはずだ。体育や身体検査、どうするのか。

「それはそうだな。知らずに入れたというのが妥当だろう」

定岡刑事は彼女と松井とのDNAも調べると話した。だが、エージが狙われるのはどういうことか。俺たちはサーファアを追いかけてるだけであって、まだ、何もつかめてはいないのに、なぜ消そうとするのか。

その日、刑事が帰った後、俺はエージに話した。

「もう、お前はこの事件に関わるなよ。俺も定岡刑事にしばらくお

となしくしてろって言われたし、静かにしてるよ」

「嘘だね。ジョーは一人で探すつもりだろう」

「違うよ。お前がもし、死んでいたらと考えたら恐ろしいよ。お前の家族に会わず顔がないよ」

「俺だって怖いさ。でも、このまま何もなかったら、余計に怖いよ」

「レイはどうしてるんだろう」

そう言いながら、俺たちはカップラーメンをすすった。

エージは流石に弱っていて、

「今日は休むわ」

というので、俺も一度家に帰って、今後のことを考えることにした。エージを巻き添えにしたことは悔やんでも悔やみきれない。あいつにもしものことがあったら、本当に取り返しがつかない。海江田物産の跡取りなのだから。

疲れ切った体で部屋に帰ると、ケータイが鳴った。

「もしもし」

「あの」

「レイ、レイなんだろう」

ケータイの向こうでレイの息遣いが聞こえる。

「ジョー、私のことを信じて。松井さんを殺してなんかいない」

「わかった。どこにいるんだい。迎えに行くから」

「きつとよ。本当に信じて。あの日、私は確かに松井さんのところへ行ったけど、殺すはずがないわ。彼は私と母の恩人なの」

「どういうこと？」

「昔は母と愛し合っていた人なの。病院のお金も貸してくれた人なの。今は詳しく話せないけど」

「早く出て来いよ。警察だって信じてくれるさ」

「わかってる。でも、あと少ししたら解決するはず」

「おい、なにを考えてるんだ！ レイ！ 危ないことはやめろ！

「エージだつて殺されかけたんだから」

「えっ、エージさんも？ 私のせいね。こんなことになって、本当にごめんなさい」

「違うよ、そんなことを言いたいんじゃないよ」

「私、もうすぐ自分で解決したら警察にも行くわ。正直に話もする。だから、私を信じて」

「俺があのとときに君を突き放したりしなかったら……」

「うっん、当然よ。私の方が悪いもの。じゃ……」

そのまま、レイの電話は切れた。

俺は早速定岡刑事に連絡した。松井が金を出したのは昔の恋人だったからということで、決して殺す相手ではないということ。

定岡刑事はレイの着信履歴の公衆電話の位置は、神楽坂の公園だと突き止めた。

神楽坂になぜレイはいるのか。誰がいるのだろう、その場所に。

第九章

定岡刑事と俺はそれぞれ神楽坂に向かっていた。

レイは一体誰に何をしようとしているのか。

俺は神楽坂の周辺でのことを思っていた。鮫島米穀店の一家はよく知っていたが、あの一家はあくまでも噂好きというぐらいでしかなかった。じゃ、誰だ。

喫茶店は人のよさそうな親子だった。母と息子だった。いつでも心配しているからと優しい言葉をくれたのだ。

全く思い当たらない人物ばかりだった。

檸檬にもう一度寄ってみようと、バイクを向けた。檸檬はまだ店じまいしていないようだった。

「こんばんは」

俺がそう言いながら入ると、そこにはあの優しそうなマスターがいた。マスターは一瞬びっくりしたような様子を見せたが、それはこんな時間に俺が来るとは思っていなかったからだろう。

「どうしたんですか」

「いや、ちょっとコーヒーでもいただきたくなくて」

「いいですよ。もう閉めるところでした」

「悪いですねえ」

「いいんですよ」

「今日はお母さんは？」

「昨日から風邪ひいたので家で休んでいます」

「そうですか、それはいけませんね」

マスターはキリマンジャロのいい香りをさせながら、カップにたっぷり注いでくれた。

「どうぞ」

「どうもありがとう」

やっぱり、カップの横には小さなサブレがのせてあった。

「レイちゃんは？」

「ええ、どうもまだ見つからないんです。でも、電話をくれました」
「電話？」

「ええ、元気でいるみたいなのですが、この近くから掛かっている
ようなんです」

「場所を教えてくださいませんか」

「いえ、調べたんです」

マスターはあつというと、カップを落とした。高そうなカップが
割れてしまった。

「すみません、手を滑らせてしまつて」

「怪我してないですか」

「ええ、大丈夫です」

すると、店の上から大きなドンドンという音がしてきた。

「何の音ですか」

「いや、お袋が呼んでるんです。起きて来れないから飲み物でも欲
しいでしょう」

「でも、さっきお母さんは家にいるっておっしゃらなかったですか」
はつとして、俺は上に目をやった。

「まさか……」

立ちあがつて、二階へ行こうとすると、マスターは後ろから飛び
かかつて来た。

「何をする！」

「うるさい！」

「貴様だったのか。レイに何をした！」

「黙れ黙れ！」

マスターはあの温和な風貌からは程遠く、めちゃくちゃ力が強く、
ダスターで首を絞めてきた。

そこへ定岡刑事が飛び込んできた。

「藤田周平！ 松井大吾殺人と、海江田英二殺人未遂で逮捕する！」
俺はすぐに二階へ駆け上がった。レイは奥の倉庫で猿ぐつわをさ

れ、手足を縛られていた。

「レイ！」

あわててほどくと、レイは掻きついてきた。

藤田周平はあの義父の息子となった男だった。つまり、レイの義父と逃げたのは彼の母だったのだ。だが、深く潜行していた二人の付き合いは、近所に知られることはなかった。名前も通称は以前のままだったし、藤田というのは婚姻届の中だけだった。修はこの店の権利書もねらっていたのだ。

それが分かれると、周平は義父を殺すことを計画した。松井や義父を恨んでいるのはレイということは誰の目にも明らかだったから、レイの犯行にすれば逃げ切ることもできると考えていた。修の遺体は倉庫の床下収納から、衣装ケースに入れられて出てきた。

レイは松井の家でこの男の姿を目撃していた。金を借りると話していた周平は、レイにとって優しい級友のはずだった。レイが帰るとすぐに、周平は松井を襲った。松井には以前から金を借りていた。その時に奪ったのはレイの置いていったバイクの代金だった。その札を三枚だけ置き、後は奪ったのだった。レイの指紋は残されて、自分の綺麗な拭きとった。

エージはあの聞きこみをしたときに、帰りに店に寄ったのだ。そこで、藤田周平と藤田修宛の封筒を見られていた。だが、肝心のエージはそんなことみじんも疑わなかったのだ。やられ損というのがエージらしい。

レイはやっと、藤田修の行方を見つけてこの檸檬だとわかったのだ。この同級生の男の義父になったということで、レイは同情すらしていたのに、まさか周平に狙われるなんて思ってもいなかった。

定岡刑事はこの一連の事件のつながりこそはわかったが、肝心のサーファーは見つかっていない。レイが周平だけでなく、まだ、サーファーにも狙われていることは警察としては何としても早く見つ

けて逮捕したいところだ。

俺はレイを連れて部屋に戻った。レイと俺はしばらく抱き合ったまま、そして深い眠りについた。

あれから、半年、俺たちは一緒のアパートの隣同士になった。すぐ、俺のものにするという考えが皆無とはいえなかったが、ここですぐとなるといかにも流されてそのままになりそうな印象を与えるのも嫌だった。

「ジョー、それって、蛇の生殺しみたいじゃないっすか」

「うるさい！」

「よく分かんない二人ですね」

レイは、何か作ると届けてくれた。近所のレストランで勤めていたから、いろいろと覚えることができるかと張り切っていた。ストーカーの野村良太は未だに捕まっていないから、近くに住むことを考えてのことだった。俺たちはお互いが必要だった。これからの未来を考えて、共に生きることを誓っていた。レイも俺も生半可な気持ちではなかった。

レストランの帰りにデートをしようと約束していた。俺は今まで貯めていたバイト代で、真珠の指輪を買っていた。レイに結婚を前提として付き合ってくれと正式に話すつもりだった。

同情ではなく、彼女とともに一生歩いていくと決めたから、指輪も買った。

レストランの勝手口には彼女の自転車があった。

二〇分待った。時間を間違えたか、それとも、残業を頼まれたのか、ちらつとのぞいてみるとレイの姿がない。コックの一人に尋ねると

「今日は三〇分前にあがったよ」

「えっ！」

俺は油断していた。もうずっと、彼女の帰りは迎えに来ていたの

に、この日は指輪を包装してもらって少し遅れたが、彼女の方は早く終わったようだった。

しまった。あわてて、家に帰ったがいない。定岡刑事に連絡すると、すぐに賭けつけてくれた。

「いないんです。レストランの上がる時間が十分早かったらしくて」「あいつはずっと見張っていたんだな。女のところへ調べに行かした」

定岡刑事のケータイが鳴った。

「何？ 女の手がなくて！ 女はいる？ くそっ！ 野村は車で逃走したな！ すぐ手配しろ！」

奴は女の手で逃げているようだ。

最終章

野村良太が乗った車が見つかったのは、中野車庫近くの駐車場だった。他人の駐車場に違法駐車のあるということで、調べたナンバーが野村の女の車だった。警察はその周辺をくまなく探したが、どこに行ったのか分からない。車内には手掛かりになるものが残されてはいなかった。

警察は野村がなぜ、そこに行つたのか理由を探していた。男とその接点は見つからず、警察の捜査を攪乱しようとしてるのではという意見も出された。

俺はエージから電話をもらった。

「どうだい、具合は」

「ああ、もう平気さ」

「さっき気付いたんだけど、あのサーファアの奴、刺青の女に興味があるって店の人が言つてたのを思いだして」

「刺青してる女？」

「うん、だから、今の愛人も刺青があるんだって」

そんなことは知らなかった。

「店の人が言うには、ある彫り師が彫つた蝶は色が変わるらしいって言うんだよ。あいつはそれを一度見てみたいと話していたって言うんだ」

そんなことのために、これほど追いかけているのか、バカらしいと思いつつも、そのことのためにこれほど執拗に追いかける男の執念に恐怖を感じた。レイは早く消したがっていたタトゥー。でも、そんなことあるのだろうか。その彫り師というのが松井なのか。

エージはその話を思いだして、インターネットで調べてみると、名彫り師のインタビューとあり松井の写真があるそうだ。

「今までに、この刺青をしたのは三人だけだ。組長の奥さん、もう一人は昔の恋人、もう一人は……忘れたなあって書いてるよ」

忘れたというのはレイのことだろう。何でそんなものを彫ったのかと、怒鳴りたくなる気持ちを抑えながら、今レイがどのような気持ちでいるのかを想像するとたまらなかった。

エージはもう大丈夫だから一緒に行くというのを無理に止めて、俺は定岡刑事のもとへ走った。

一方定岡刑事は現場に野村の愛人を呼び確認させていた。車はやはり女性のもので、なくなっているものはないようだった。だが、女は何だか落ち着かない様子だった。

「何か、車の中で変わったところがあるんじゃないのか」
「いえ、別に」

「若い女性が連れ去られているんだ。これ以上野村に罪を重ねさせていいのか」

「本当に……何も……」

トランクを開けると、女は途端に震えて話しだした。

「刑事さん、車の中には海に落ちた時に窓ガラスを割ることができて、シートベルトを切るハサミのようなものがないです」

「他には？」

「それと、トランクの中には何でもよく切れる料理ばさみ、ステンレス製の串など、貝や魚を料理するために」

俺は物騒なものをなぜ乗せているといたくなくなった。

すると、盗難車情報が寄せられた。

「近くのパチンコ店で車にキーをつけたままの軽四が盗まれたそうです。そのパチンコ店です」

「くそ、乗り換えたか」

「野村は海なら地理が詳しいんじゃないでしょうか」

定岡刑事は女に

「いつも彼が行っていた海はどこだい？」

「分からないわ。でも、湘南には三回連れて行ってもらったことがある」

湘南という確証はないが、取りあえず軽四が盗まれたパチンコ店

からどちらに向かったのか、見てる者はいないか聞きこみが始まった。特にパチンコ店に来た者が駐車場で二人を見ていないかと。景品交換所の男に聞くと、

「うーん、あの二人かなあ。夫婦喧嘩をしてるんだと思ったよ。旦那が怒ってるんだとばかり」

「女性はこの写真の人ですか」

「そうみたいだが…男は確かにこの人だ。よく見えたよ。景品交換所の窓は小さいから見えにくくてねえ」

「どっちへ乗って行きましたか」

「左に向けて行つたよ」

定岡刑事は早速指令を出した。なんとしても助けないといけない。俺はレイを助けたあの海にいるような気がした。

定岡刑事は、俺の目を見て

「浜野刑事と行け」

そう言つて、浜野洋一というまだ若い刑事と行くことを許してくれた。

エージはいてもたつてもいられないと、ケータイに掛かってきた。

「頼む、エージ。あのバイトした海に来てくれ。あそこが引つかるんだ」

「よし、すぐ行くから」

海の家は閉鎖されており、観光客など誰もいない。だが、俺は確信していた。隠れるのも海が一番野村には都合がいいに違いない。

その海の家に隣接するシャワールームと倉庫、そしてガレージ。浜野刑事は懐中電灯を照らしながら静かに近づいた。

一瞬光るようなものが見えたと思った瞬間、浜野刑事の右腕に料理ばさみが突き刺さった。

「うっわああああ」

浜野刑事の絶叫が聞こえた。俺は急いで刑事の元へ近寄り、周りを探した。

「近くにいますだ！ 気をつけろ！」

浜野刑事はそう叫んだ。

俺は落ちた懐中電灯を握り照らすと、倉庫の戸が風で開いたり閉じたりしている。だが、物音はしない。

「レイ！ どこだ、レイ！」

段ボールがうずたかく積まれた倉庫の中、一体どこにいるのか。突然バーベキューの串が足に突き刺さった。

「ぎゃあああ」

俺の脚は串がふくらはぎから出ていた。鮮血で段ボールを染める中、俺は見えた。あいつの目が怪しく光るのを。

「出て来い！ 野村！」

俺たちのほかには誰にもいないと分かったのか、野村は姿を現した。

「レイはどこだ！」

「大事な人なんだから、教えるわけではないだろ」

「もう、どこにも帰るところはないんだぞ」

「構わねえよ。あいつさえ一緒にいてくれれば」

「頼む。彼女に何もしないでくれ」

「お前の女は素敵な刺青があるだろ」

舌なめずりをしながら、ぬけぬけという野村は、さらにこう続けた。

「前はよく分からなかったが、今度は蝶の色を替えてみせるんだ」

「バカなことを！ やめてくれ！」

「ああ、俺はバカだよ。あの女の蝶は燃えると色が赤くなるって聞いたのさ。松井が蝶を彫る女は、みんなそうなんだとよ。いいだろ？ 見せてもらっても減るもんじゃなし」

その狂ったような話に、レイの恐怖心がいかに大きいか、俺は居場所を問い詰めた。

「どこだ。どこに彼女を隠したんだ！」

「さあね」

野村は近づくと、さらに手にはもう一本の串が振りおろされた瞬

間、その串は野村の太ももに刺さった。エージだった。野村はのたうちまわった。

「やめろー!」

エージはさらにもう一本手にした。

「彼女はどこだ!」

「ぎゃあああああ」

野村は痛がりながらも、言おうとしない。エージはさらにもう一本を野村の首に当てた。

「いいんだぜ。このまま刺しても」

「俺を殺しても、あいつの場所は分からねえぜ」

うそぶく男の左手の甲にエージは串を突き刺した。

「うわあああああ」

「あと二本あるぜ」

「わかった、あのシャワールームの裏だ」

エージが捕まえてる間に、地を流しながら走った。シャワールームの金具に手を繋がれてレイはいた。

「レイ!」

レイはガムテープを口に巻かれて、足も手も繋がれていた。俺がほどくとレイは体ごとぶつかって来た。だが、刺さった串を見ると悲鳴を上げた。

「大丈夫だよ。ちょっとでかいモモ焼きさ」

「ごめんね、私のせいで」

二人で出ると、救急車とパトカーがやって来た。定岡刑事は俺や浜野刑事を見て驚きながらも、エージの正当防衛という野村の二本串刺しには呆れていた。

俺は病院で手当てを受けた後、レイに小さな包みを手渡した。

「随分遠回りしたけど、やっとこれを渡せるよ」

レイはリボンをほどくと、出てきた真珠の指輪を見つめ、

「ありがとう。一生大切にするわ」

「俺もだよ」

そう言つと、レイの肩を抱き寄せた。レイの唇は震えていたが、それは俺も同じだったかもしれない。

その夜は痛い足のこともすっかり忘れ、俺はレイを抱きしめていた。

レイの蝶は確かに色が変わった。

青い蝶に燃えるような赤の色が染まってゆく。波のようなレイの動きに合わせ、蝶が舞い踊るようだった。

「蝶の色が変わったよ」

「いいの、そんなこと。私は子どもとプールやお風呂に行きたいの」「そうだな」

俺は手の中にそつと蝶を隠した。明日は消すという青い蝶。

これからは俺の心の中で飛んでゆくのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8911n/>

タトゥーのある女

2010年10月8日12時12分発行